

## ブック 医の小説集『一口坂下る』

今年3月にギニアにおける集団発生から始まったエボラ出血熱は、リベリア、シエラレオネ、ナイジェリアなど西アフリカ諸国へと広がり、10月1日までに西アフリカ5カ国で7,492人（疑い者を含む）に達し、すでに3,439人が死亡したとされる。エボラ出血熱は血液や体液の接触によりヒトからヒトへ感染が拡大し多数の死者を出すため、従来から注目されてきた。

また、わが国において8月に発生したデング熱は東京・代々木公園周辺が感染の中心で、感染者は10月6日11:00現在155人に達している。デング熱は主にヒトスジシマカによって媒介され、発熱、頭痛、筋肉痛、関節痛があり、ハシカに似た症状を呈すという。通常、ヒトからの直接感染はないらしい。

今、医療界では、院内感染対策が強く打ち出されている。感染症は以前と違って、地球の温暖化、人口の高齢化、交通手段の発達により、感染症の種類、発生地域がどんどん広がっている。温暖化はウイルスを持つ生物の生息範囲を広げたし、高齢化は免疫力の低下したヒトを増やした。また交通手段の発達には、本来なら生存しない地域に感染媒体となる生物を拡散させる働きをした。さらに、抗生物質多用による耐性菌発生の問題もある。

\*

そんな状況にある折、純文学作家である中原 泉（なかはら いづみ）氏が医の小説集『一口坂下る』を上梓した。これは『生きて還る』（2008年）、『リンダの登音』（2011年）に次ぐ3作目の医小説集である。「一口坂下る」のほかに、「トゥルップ博士の憂鬱」「舞う子」「紅毛の解体新書」「三鬼弾圧異聞」が収載されている。

\*

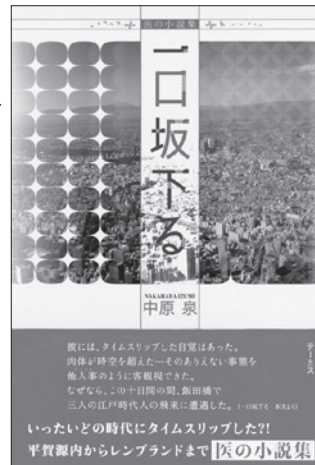
「一口坂下る」は、江戸時代の疱瘡（天然痘）感染者の日常の有様を描いたもので、現代に生きる主人公がタイムスリップし、感染者家族と行動した数奇な体験を語っていく。一口坂とは、靖国通りからJR線路と外壕をまたぐ新見附橋をむすぶ、長さ300m、幅5mほどのゆるやかな変哲もない坂だが、由来があるという。

昔、京都にある一口という里が“いもあらい”と呼ばれたことから、関東でも同じ読み方をしたとされ、いもは疱瘡、あらいは洗うを意味し、疱瘡を療治するという言葉だった。一口坂は永い間“いもあらいざか”と呼ばれていたが、後に誤読されたまま“ひとくちざか”に改められたそうである。しかも、坂の下方には霊験あらたかな水場があって、いもに苦しむ病人たちが我がちに坂を這い下りて霊水にひたる……。

### ■いったいどの時代にタイムスリップした?! 平賀源内からレンブラントまで

中原 泉（なかはら いづみ）著  
単行本 216頁  
定価（本体1,500円＋税）

発行所：株式会社テーマス  
東京都千代田区一番町13-15  
Tel 03 (3222) 6001



まさに、なかはら いづみ氏独特の豊富な語彙と確かな時代考証、精緻な筆運びで仕上げられている。

収載されている一編で、従来の作品とは若干趣を異にしているのが「舞う子」である。

思わぬことから身籠もってしまった眼科医の塔子はシングルマザーになる覚悟でいたが、超音波診断の結果、逆子だった。お腹の子は、へその緒でつながる母親の声しか通じないと思ひ込む塔子は、女の子とわかっているお腹の子を「舞」と名づけ、マーチャンと呼んで何かにつけ話しかけている。

自分が帝王切開で産まれたことで「母親は自分のせいでお腹を切った」と子供心を痛めていた塔子は、帝王切開だけは避けたかった。出産までに逆子は直せるのか。産婦人科で胎児の頭を下にする“外回転術”を試みるが、妊娠32週も過ぎており効果がなかった。

そんなとき、母親が鍼灸療法により逆子が正常位になることを教え、鍼灸治療院も予約していた。それは整胎術の1つで、灸や鍼により経穴（ツボ）を刺激して療治するものである。受療後、帰宅して「うっ」、胎児の舞がしなやかにゆるやかに反りかえり、頭が上から下へ回転した。「マーチャンが舞った！」

\*

「舞う子」は、鍼を打ち吸角療法で体調を整えている私にとって、鍼灸治療の幅広さをさらに知る一編でした。また、添付されている解説『中原 泉の世界（医の小説）』（小谷田 宏氏）も読み応えのある資料です。

それにしても、超多忙な日常を送っている著者は、いつ、どのように執筆しているのでしょうか。ひょっとして、それは一種のストレス解消法なのか？（M.T. 記す）